



インドCDQ建設プロジェクト

OVERSEAS EXPANSION OF ENERGY-SAVING AND ENVIRONMENTAL TECHNOLOGY

Project Phase 01: 鉄鋼需要の高まるインドでのCDQ建設

2011年の秋、入社2年目の金ヶ江は、上司から打診を受けた。「CDQ建設を経験できるチャンスがあるが、インドに行く気はあるか?」。金ヶ江は躊躇なく即答した。実は過去、先輩社員から聞かされたインドでのプロジェクト体験談に、強く興味を持っていたのだ。赴任地であるJSWスチールのビジャナガール製鉄所は、バンガロールから車で7時間。市内では地下鉄の延伸工事が続いていて、テレビを点けると自動車のCMが目玉を引く。インドの鉄鋼需要が高まっているのは、金ヶ江の実感としても明らかだった。製鉄所構内のコークス炉は、ダストを含んだ白い蒸気を勢いよく吐き出していた。この光景もまた経済成長の象徴でもあるが、一方では環境破壊とエネルギー消費の象徴でもある。その解決策としてCDQを設置することこそが、金ヶ江らプロジェクトメンバーの任務に他ならない。CDQ（コークス乾式消火設備）は従来の湿式型と比べ、コークスの粉じんを約1/100以下に低減。さらには冷却時の蒸気で発電も行い、大幅な省エネとCO2削減を実現できる環境調和型設備だ。

Project Phase 02: 三国から求められるリーダーシップ

日鉄エンジニアリングでは、2003年に中国企業との現地合弁企業を北京に設立し、中国国内で36基のCDQを受注・建設してきた。その実績を武器に、新たなマーケットとして踏み出した地が、ここインドなのである。金ヶ江の役目は、図面のやりとりや設計変更など、現場の動きを的確に関連部署に繋ぐこと。設計・製作を行う中国人と工事を進めるインド人たちとの緊密なリレーションが求められる。中国人技術者たちは、高い意気込みを持つ一方で、不安を抱えていることは金ヶ江にも伝わってきた。中国内なら気心も知れ融通も利く業者を使うことができる。だが、インドでは工事業者が相手だ。設計に不備があれば、そのたびに手続きやコストも発生する。ドキュメントをあまり残さない商習慣の中国と、契約社会のインドとのバランスをどうとるか。技術の理解度は高い中国と、役割分担を徹底させるインドといった、それぞれの強みをどう生かすか。金ヶ江は、客先に対してははっきりと指摘するリーダーシップが結果として事態をいい方向に向かわせることを、上司の姿から学んだ。



Project Phase 03: 帰国後に感じるプロジェクトへのやりがい

約1年の駐在を経験して、日本へと還ってきた金ヶ江は、ふと考えることがある。現地赴任する前、インドの学会でCDQをプレゼンした時のこと。現地の製鉄メーカーからの質問は、環境性能ではなく経済性に関することに集中していた。この巨大市場で勝っていくためには、コスト面のPRはこれからも欠かせないだろう。だが、インド側の意識も変わってきている。プロジェクトの後半、工事の遅れを気にしていないように見える客先のスタッフに、金ヶ江は尋ねた。「早く発電できるように急がないと、コストがもったいないですよ。そもそもどうしてCDQを建設しようと考えたのですか?」。すると、彼らはこう答えた。「コストがかかるかもしれないけど、CDQで消火したコークスを使えば高炉の調子は良くなるし、なにより粉じんがなくなって環境にいいじゃないか」。インドでは、その後も次々とCDQの建設を行っており、高まる環境ニーズに応えるべく、CDQに続く第二、第三の商品を売り込んでいく活動も新たに始まっている。

